

伝統的地域の 活性化活動を担う

—函館市 特定非営利活動法人・元町倶楽部—

北海道を代表する観光地・函館市は、異国情緒豊かで美しい港町として優れた文化遺産を資源に、全国有数の観光都市に発展してきたが、'98年をピークに観光客の入れ込みは伸び悩んでいる。



遺愛幼稚園

この現状を打破するために、函館市の市民と行政が協働し一丸となってまちづくりに取り組んでいる。そのなかから、「こすり出し」運動を通じて、歴史的建造物の色彩を再生し、活性化活動の一翼を担っている、特定非営利活動法人・元町倶楽部にお邪魔した。

市民参加によるまちづくり

'96年3月、函館市は、住民・高校生の意識調査やまちづくりアイデア募集などをもとに、21世紀を展望した「第4次函館圏総合計画」（'96～'05年度）を策定した。「シンフォニック・ポエム21」と名づけられたこの計画は、国際化、高齢化、情報化、環境対策などを視野に入れた「ふれあいとやさしさに包まれた世界都市」を目指し、「交流拠点をめざすまちづくり」、「地域の特性を生かした個性のあるまちづくり」、「住民の協働によるまちづくり」の3本を基本姿勢としたものである。

この市民と行政との協働のまちづくりを進めるため、第4次函館圏総合計画策定の際には公募で100人会議が設置され、また、'97年度の都市計画マスタープラン策定の際には、公募された21人の市民による懇話会「G・D・21

（グランド・デザイン・21）」の手により素案づくりが行われた。

このような市民と行政との協働型のまちづくり活動は、ボランティア市民を中心として'88年9月の「西部地区歴史的景観条例」制定を機に、特別史跡「五稜郭跡」を会場とした「函館野外劇」が開催されたことを嚆矢として、冬場の観光オフ・シーズンには「はこだてクリスマスファンタジー」や「五稜星（ほし）の夢」など、多くの市民による手づくりイベントが開催されるようになったことが背景にある。

元町倶楽部立ち上げ

函館市のまちづくり活動を活性化させるきっかけとなった「函館市西部地区歴史的景観条例」は、西部地区の一部120haを「歴史的景観地域」に指定し、この地域における建築行為などは市役所への

届け出を義務づけたものだった。

条例制定の背景となったのは、'78年に「旧北海道庁函館支庁庁舎（北海道指定有形文化財）」が北海道開拓の村（札幌市）へ移転する問題で市民団体「函館の歴史的風土を守る会」が発足するなど市民運動が盛り上がったことにあり、市もこれを受け、重要文化財「旧函館区公会堂」の修復、元町公園の整備に取り組み、景観条例制定と動きだすのである。

この「旧函館区公会堂」の修復作業を観ていた元町倶楽部のメンバーが、歴史的建造物の塗装の下に現在の外観と違う色の塗装が隠されていることに気づき、歴史的建造物の塗装表面をサンド・ペーパーでこすって古い色を調べる「こすり出し」運動が始まり、現在の「元町倶楽部」の発足となった。



「こすり出し」作業

時層色環

街の色彩再発見。下見坂の町家に塗り重ねたペンキの層を発見して、ペンキ色彩を通した街の歴史、文化を研究する「こすり出し」運動により、歴史的建造物のペンキ塗膜をサンドペーパーで削り、研ぎ出す「こすり出し」という誰もが手軽にできる、楽しい作業方法で約100軒近くの建物を調査し、以前は緑や灰色、白、茶色であったことを発見し、昭和から現在までに至る街並みの色彩の変遷を明らかにした。

戦時中は灰色が多く、戦後はパステル調の明るい色彩が多く、また、戦前の公共建造物は青や白、黄などのハイカラな色彩で、民家のモス・グリーンが街並みを形成していたことが分かってきた。ちなみに、建物に刻まれた色の歴史から時代の貌（かお）がみえてくることを元町倶楽部のメンバーは“時層色環”と名づけた。

函館からトラスト

'91年に「こすり出し」運動の研究成果である「港町・函館における色彩文化の研究—下見坂のペンキ色彩の復元的考察」がトヨタ財団が主催する「第5回“身近な

環境をみつめよう”研究コンクール」で最優秀賞を獲得。この奨励金2千万円を原資に「函館からトラスト」の掛け声のもとに、'93年7月、市民によるまちづくりのための公益信託事業「函館色彩まちづくり基金」を設立して、「市民の市民による市民のための街づくりを目指して」活動を開始、市民の代表からなる7人の運営委員と1名の信託管理人が寄付を募りながら基金の運営を開始した。

'00年までに20件の助成、3件の自主事業への活動支援を行っているが、この「函館からトラスト」は、次のような5つの“から”にこだわって、市民のまちづくりを目指している。

- ① 函館のカラーにこだわる 函館のカラー（色彩や地域の歴史・文化）にこだわった街並み、まちづくりを支援する。
- ② 函館からの発信 市民の活動要求を育て、市民まちづくりの活動の輪を広げる。
- ③ からくち（辛口）の情報 行政、市民にとって辛口の内容や言いにくいことを自由に言い合う。
- ④ カタリスト（触媒）としての「から」 基金に関係する人々、活動のカタリスト（触媒）として機能する「函館からトラスト事務局」と情報媒体としての機関誌「から」の発行。
- ⑤ 目に見える成果から 助成活動を通して、実際の環境に、目に見える成果を着実に積み上げて行くことで、市民、行政、企業等の基金への評価を高めてもらおうと考えている。

まちづくり公益信託の果たす役割

現在、西部地区は高齢化や少子化が進んでおり、若い住民が少なくなっている。若い人が住めるよ



元町倶楽部 太田誠一氏

うなまち、コミュニティ豊かなまち、バランスの良いまちにしていきたい。そのためには、市と市民個人個人が相互に協力しあっていかなければならない。

元町倶楽部は、次の段階として、新しいアイデアや手法で、「こすり出し」のようなフィールドワーク的なことをしていこうと考えている。

従来、市民のまちづくりというと、なにか切実な課題や反対運動に突き動かされ、やむにやまれず立ち上がるというタイプの活動が多かったが、まちづくり公益基金から生まれつつある市民の活動は、市民サイドで自主的にまちづくりのテーマを設定して市民が自ら考えて楽しみながら行動する、能動的かつ非義務的な活動が特色のように思われる。

能動的なまちづくり活動では、助成額がたとえ少額でも、それが呼び水となって、満足できる効果が出るところまで自主的に活動を展開していくケースが多いのである。問題は、その呼び水と、困った時などに相談に乗ってくれる相手や情報ネットワークが用意されていることが重要なのである。市民の自主的な活動の受け皿として、助成面やノウハウ、情報提供の面からまちづくり公益信託が地域で機能する可能性がそこにあるように思える。